

## 社会科学古典資料センターにおける多様な教育プログラム

### Educational Programs of the Center for Historical Social Science Literature at Hitotsubashi University

馬場幸栄

BABA Yukie

#### はじめに

一橋大学社会科学古典資料センター（1978年設置。以下「センター」と記す）は社会科学系分野の西洋貴重書を約7万6千点収蔵する貴重書専門図書館である。センターは発足当初より教育プログラムの開発・運営に力を入れ、全国の図書館職員らを対象とした講習会を1980年度より始め、2012年度以降は全国の中高生や一橋大学の学生を対象とした教育プログラムにも取り組んできた。センターが提供するそれら教育プログラムの内容と現状を以下に報告する。

#### 1. 図書館職員向け教育プログラム

##### 1.1. 西洋社会科学古典資料講習会

「西洋社会科学古典資料講習会」は1980年度に開始された。全国の司書、学芸員、教員、学生等を対象とする本講習会では、3日間にわたって西洋貴重書に関する講義を受けることができる。講義の内容は幅広く、西洋貴重書の歴史、形態的特徴、書誌の取り方、西洋貴重書を題材とした学術研究成果の事例紹介等が各分野の専門家によって論じられる。カリキュラムは受講生のニーズに合わせて毎年見直されており、近年ではIPM（Integrated Pest Management 総合的有害生物管理）、展示論、図像学等の講義も組み込まれている。定員は30名で、すべての講義に参加すると修了証が授与される。一橋大学の職員であれば聴講生として一部の講義のみ受講することも可能である。受講生の満足度は高いが、いっぽうで、全国の図書館でパートタイマーや期限付きフルタイム職員として働いている方々からは、「3日連続の出張は職場で認めてもらえない」「有給休暇を取って参加する場合、交通費・宿泊費が私費となるので経済的負担が大きい」といった声も多く寄せられている。実際、そうした状況を反映してか、一橋大学以外の大学図書館からの参加者数は減少傾向にある。今後はパートタイマーや期限付きフルタイム職員の状況も鑑みて、日数の短縮や旅費の支援なども検討してゆく必要があるだろう。

##### 1.2. 西洋古典資料保存講習会

「西洋古典資料保存講習会」は2000年度から始まった実習中心の教育プログラムで、西洋貴重書の保存と修復に関する知識や技法を学ぶことができる。3日間にわたって行われる本講習会で受講生はまず西洋貴重書の素材、形態、劣化要因に関する講義を受け、そののち、調査票

の記入、クリーニング、保存容器作成、破損したページの修理などの実習に参加する。センターに付属する保存修復工房や貴重書庫の内部も見学できる。受講生の満足度は高いが、定員が8名とかなり限られているため、倍率が高くてなかなか参加できないという嘆きがしばしば聞かれる。従来は受講生2名に対して指導員1名を配して実習を行ってきたが、今後は定員の数を増やすために実習の内容や方法を見直してゆかなければならないだろう。また、「西洋社会科学古典資料講習会」と同様にパートタイマーや期限付きフルタイム職員は参加しにくいという声が寄せられているため、やはり日数や旅費支援についても検討してゆく必要がある。

### 1.3. 新任職員研修

「新任職員研修」は2005年度頃から行われている一種の学内研修で、一橋大学にあるセンター以外の部署（一橋大学附属図書館、一橋大学経済研究所資料室、等）において貴重書および一般図書を扱う新任職員のために、不定期に実施している。新任者1名あたり2日間にわたって（1日2～3時間ずつ）西洋貴重書の取り扱い方、クリーニング、クータの作成などを指導している。

### 1.4. 西洋古典資料保存修復実務研修

「西洋古典資料保存実務研修」は2016年度に開始された教育プログラムである。本研修の目的は、全国の各地方において西洋貴重書保存修復の中心となる人材の育成および各地方とセンターとのネットワーク形成にあり、文部科学省の「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」（平成28年～平成30年）として実施された<sup>1</sup>。2018年度までの3年間に、北海道、東北、関東、近畿、中国、九州からのべ10名の研修生を受け入れた。研修期間は研修生ごとに異なるが、3週間から8週間にわたる。マンツーマンで指導するため、1回に受け入れられる人数は1名のみである。研修生は中長期にわたって職場を離れなければならないため、おのずから、研修生を派遣する機関はある程度のマンパワーが確保されている大規模図書館に限定される。研修は実習が中心で、調査票の記入、クリーニング、貴重書庫の管理、保存容器の作成、低温処置、等々を学び、希望があれば都内の他の西洋貴重書関連施設を視察したりもする。なお、センターは職員数が非常に少ないため、研修生の指導に多くの時間が割かれる研修期間中は通常業務の一部を停止せざるをえないという問題を抱えている。もし今後も本研修のような教育プログラムをセンターで行う場合は、通常業務に支障をきたさないように、研修の内容や期間の見直しが必要となるだろう。

### 1.5. 機関研修・地域研修

「機関研修」（機関講習）・「地域研修」（地域講習）は2018年度に初めて行われた出張教育プログラムである。これらの研修もまた、文部科学省の「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」（平成28年～平成30年）の一環として実施された。これらの研修は、一橋大学を会場とする講習会・研修会に参加することが難しい地方の方々をターゲットとしており、センター職員が出向いて行って半日かけて講義と実演を行う。「機関研修」は特定の機関の職員たちのために開催され、「地域研修」は特定の地域に存在する複数の機関の職員たちのた

---

<sup>1</sup> 保存実務研修（西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業）、一橋大学社会科学古典資料センター。 <http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/training.html>（最終閲覧日2019年3月11日）

めに開催される。2018 年度は東北大学を会場として、東北大学の職員を対象とした「機関研修」と東北地方のさまざまな機関の職員を対象とした「地域研修」を同時に開催し、センター職員が西洋貴重書の保存修復に関する講義と保存容器制作の実演を行った。受講生の殆どは西洋貴重書の保存修復について初めて学ぶという方々で、短時間の研修ではあったが満足度は高かった。

## 2. 中高生向け教育プログラム

### 2.1. ひらめき☆ときめきサイエンス

「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」と題された中高生向け教育プログラムを 2012 年度より実施している。「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」は日本学術振興会の委託事業であり、科研費の研究代表者がその成果の一部を全国の小学生、中学生、高校生にわかりやすく解説することで、若者の科学や学術研究に対する関心を高めるという意図のもと開催されている。センターでは、年に 1 回この「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」を実施し、丸 1 日かけて中学生と高校生に西洋貴重書の歴史、特徴、保存修復の基礎を教えている。2018 年度はパピルスや羊皮紙の実物に触れたり、本物の羽根ペンで歴史的書体を書いたり、金箔を使って中世写本の装飾を再現したりする実習も行った<sup>2</sup>。参加した中高生たちからは「楽しかったので、もっと学びたい」「できれば来年も参加したい」と好評だったが、定員 12 名のところ 100 名以上から応募があり、希望しても参加できない中高生も多かった。センターの限られたスペースと人員で、安全性を確保しつつ定員数を増やす工夫が課題となっている。

## 3. 大学院生向け教育プログラム

### 3.1. 博物館資料保存論

センターは一橋大学の「博物館資料保存論」という大学院生向け科目の支援を 2012 年度より行っている。一橋大学では大学院生だけが学芸員資格課程の履修を認められている。「博物館資料保存論」はその学芸員資格課程における科目のひとつであり、同科目の履修生たちが年に 1 回センターを訪れて、西洋貴重書を鑑賞したり、貴重書庫や保存修復工房を見学したり、センター教員から西洋貴重書の保存修復に使用される設備・道具・機器についての解説を受けたり、現場が直面する様々な課題についてセンター職員に質問をしたりすることができる。博物館がない一橋大学の大学院生たちにとって、センターは博物館に準ずる機関として学芸員を目指すための教育に役立てられている（博物館実習は学外で行われている）。

## 4. 学部生向け教育プログラム

### 4.1. 西洋法制史

一橋大学の「西洋法制史」という科目を支援する教育プログラムも 2018 年度に開始された。

---

<sup>2</sup> 「本を残す 本を伝える～古典資料の保存・修復・活用」ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI 平成 30 年度、一橋大学社会科学古典資料センター。  
<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/hirameki2018.html>（最終閲覧日 2019 年 3 月 11 日）

「西洋法制史」の科目を履修している学部生たちは年に1回、センターで西洋古文書解読の講義を受けることができる。講義では中近世ヨーロッパの土地証書などが教材として用いられ、履修生たちは羽根ペンを使って当時の書体や省略記号の形を学習し、証書が成立した歴史的背景について学んだうえで、その古文書の解読に挑戦する。1回105分の講義でも参加者たちは歴史的書体をだいぶ読めるようになる。だが、歴史的書体は時代・地域・用途によって異なるため、多種多様な古文書の解読が出来るようになるには連続した講義を行う必要があり、その点が今後の課題として挙げられる。

#### 4.2. 古典講読入門（歴史学）B

「古典講読入門（歴史学）B」は一橋大学における学部生向け科目のひとつで、2018年度よりセンター教員による講義が行われている。講義は105分の授業が14回にわたって行われ、履修生は西洋書物史に関する基本的文献のひとつである Christopher de Hamel 著『Scribes and Illuminators』<sup>3</sup>を英文で読みつつ、社会科学古典資料センターが収蔵する中世写本等を観察して、同書で論じられている中世写本の特徴を問近で確認することができる。教材として用意された羊皮紙に触れて銀面（毛が生えていた側）と肉面の違いを観察したり、没食子インク<sup>4</sup>の材料である虫コブや顔料として使われる鉱物について学んだり、羽根ペンを用いて歴史的書体の書写を行ったりもする。「古典講読入門（歴史学）B」は学部生のための科目であるが、大学院生からも受講したいという声が多々聞かれるため、大学院生も参加できる同様の教育プログラムの設置が課題となっている。

#### 4.3. 教養ゼミナール（馬場 幸栄）A

「教養ゼミナール（馬場 幸栄）A」も一橋大学における学部生向け科目のひとつで、2018年度よりセンター教員による講義が行われている。講義は105分の授業が14回にわたって行われる。履修生はセンター教員が作ったプリントや折田洋晴著『インキュナブラの世界』<sup>4</sup>を教材として読み進めつつ、社会科学古典資料センターで実物のインキュナブラに触れて、インキュナブラの形態の特徴、チェーンラインや透かしの調査方法、折丁記号の読み方、書誌の取り方、ISTC<sup>5</sup>やMEI<sup>6</sup>といったデータベースの使い方などを学んでゆく。この授業についても大学院生や社会人から参加したいという声が寄せられており、より広い層にどのように教育機会を提供するかが課題となっている。

### まとめ

センターは発足当初より司書らを対象とした教育プログラム（「西洋社会科学古典資料講習

---

<sup>3</sup> de Hamel, Christopher. *Scribes and Illuminators*. Medieval Craftsmen Series. Toronto: University of Toronto Press, 1992.

<sup>4</sup> 折田洋晴著、国立国会図書館図書館研究所編、『インキュナブラの世界』研修教材シリーズ No.13, 日本図書館協会, 2000 年.

<sup>5</sup> The British Library. *Incunabula Short Title Catalogue*. 2016. [https://data.cerl.org/istc/\\_search](https://data.cerl.org/istc/_search)（最終閲覧日 2019 年 3 月 11 日）

<sup>6</sup> CERL. *Material Evidence in Incunabula*. 2015. [https://data.cerl.org/mei/\\_search](https://data.cerl.org/mei/_search)（最終閲覧日 2019 年 3 月 11 日）

会」1980年度開始,「西洋古典資料保存講習会」2000年度開始)を提供し,西洋貴重書の調査・保存・管理に関する知識・技術を広めてきた。一橋大学においても新任職員に短期研修を行い,学内での知識・技術の普及に努めてきた(「新任職員研修」2005年度頃開始)。近年はさらに,日本全体における西洋貴重書の保存修復レベルを底上げすべく,各地方の大規模図書館から中長期のインターンを受け入れたり(「西洋古典資料保存修復実務研修」2016年度開始),センター職員が地方に出張して現地で短期研修を開催したり(「機関研修」2018年度開始,「地域研修」2018年度開始)と,司書を対象とした教育に力を入れてきた。

加えて最近センターは中高生や大学生を対象とした教育プログラムにも重点を置いている。全国の中学生・高校生を対象とした西洋書物学の入門的講座(「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」2012年度開始)は特に人気が高い。「博物館資料保存論」を履修する一橋大学の大学院生は年に1回センターで講義を受けることができる(2012年度開始)。「西洋法制史」という科目を履修する一橋大学の学部生も,年に1回センターで西洋古文書解読の講義を受けられる(2018年度開始)。センター教員が各14回の講義を行う科目も一橋大学で新たに2つ開講され,一橋大学の学部生であれば西洋中世写本やインキュナブラについて詳しく学ぶことができる(「古典資料講読入門(歴史学)B」2018年度開始,「教養ゼミナール(馬場 幸栄)A」2018年度開始)。

これらのプログラムに対する学内外の需要は高い。より多くの参加者を受け入れられるようにカリキュラムを見直しつつ,今後も教育プログラムの継続・発展に努めてゆきたい。

(一橋大学社会科学古典資料センター助教)